平成13年度

市原市内遺跡発掘調査報告

奈良大仏台遺跡

南岩崎遺跡

八幡陣屋跡

柏原遺跡群

2002

市原市教育委員会

序　　文

市原市は房総半島のほぼ中央に位置し、市内を南北に流れる養老川を擁し、温暖な気候と豊かな自然環境に恵まれていることから、有史以来、たくさんの人々が生活を営んできました。国指定史跡上総国分寺跡や国分尼寺跡をはじめ、市内に残る数多くの遺跡がそのことを私たちに伝えてくれます。

近年、一頃の大規模開発は影をひそめてはいるものの、地域発展のための開発行為は少しづつおこなわれております。そのような中で、いかに開発と文化財の保護とを調和させていくかは、現代に生きる私たちに課せられた大きな課題であります。

本報告書は、開発によって失われていく市内の遺跡について、国および県の補助を受けて行った発掘調査の記録をまとめたものです。

本書が学術資料としてはもとより、多くの方々が郷土の歴史に対して関心をもつきっかけとして、広く活用されることを願ってやみません。

最後になりましたが、発掘調査から本報告書の刊行に至るまでご指導・ご協力いただきました文化庁、千葉県教育委員会、財団法人市原市文化財センターをはじめ関係諸機関各位に心より御礼申し上げます。

平成１４年３月

市原市教育委員会
教育長　竹　下　徳　永

例　　言

1　本書は、国庫及び県費の補助を受けて市原市教育委員会が主体となり実施した市内に所在する遺跡における発掘調査の報告書である。

2　発掘調査および整理作業は、文化庁の国庫補助事業として助成金を受けた市原市教育委員会の依頼により財団法人市原市文化財センターが実施し、報告書刊行は市原市教育委員会で行った。

3　今年度実施した発掘調査は下記のとおりである。

（1）奈良大仏台遺跡（センター調査コード　セ338）市原市奈良字屋敷台592の一部、565-2の一部
個人住宅の建築に伴う確認調査で、調査対象面積825.13㎡のうち82㎡を発掘調査した。

（2）南岩崎遺跡（センター調査コード　セ341）市原市寺谷字的場15・16・17番の一部
墓地造成に伴う確認調査で、調査対象面積520㎡のうち52㎡を発掘調査した。

（3）八幡陣屋跡（センター調査コード　セ343）市原市八幡字仲町1277番1の一部、1277番3、1278番1、1279番1集合住宅建築に伴う確認調査で、調査対象面積209㎡のうち20.9㎡を発掘調査した。

（4）柏原遺跡群（センター調査コード　セ349）市原市柏原字原229番
個人住宅の建築に伴う確認調査で、調査対象面積431.82㎡のうち43㎡を発掘調査した。

4　本書の執筆は、小川浩一が行った。

5　八幡陣屋跡の出土遺物及び「絵図」について、多くのご教示を櫻井敦史氏より得た。

6　「絵図」資料の見方について、早稲田大学人間科学部教授　谷川章雄氏より助言を得た。

7　「御陳(陣)家屋敷ノ絵図」資料は、本市八幡在住の鈴木康夫氏より借用・掲載の許可を戴いた。

8　本書に使用した地形図は、国土地理院発行の1:25,000地形図「蘇我」「五井」「姉崎」「海士有木」「鶴舞」「上総横田」および市原市発行1:2,500地形図である。

9　遺跡全体図および遺構平面図等に使用した北は、主に磁北を使用している。また、遺構断面図中の水準は、1:2,500地形図中の数値を基準とした。なお、調査区の設定は任意の座標を使用した。

本　文　目　次

序文　例言
第1章　調査遺跡の位置と環境……1
第2章　奈良大仏台遺跡……3
第3章　南岩崎遺跡……6
第4章　八幡陣屋跡……10
第5章　柏原遺跡群……16

図　版　目　次

図版1　八幡陣屋跡「御陳(陣)家屋敷ノ絵図」
図版2・5　奈良大仏台遺跡・南岩崎遺跡
図版3　南岩崎遺跡・八幡陣屋跡
図版4・7　八幡陣屋跡・柏原遺跡群
図版6　八幡陣屋跡

挿　図　目　次

第1図　調査区の位置と周辺の遺跡……2
第2図　奈良大仏台遺跡周辺地形図……3
第3図　奈良大仏台遺跡……4
第4図　南岩崎遺跡周辺地形図……6
第5図　南岩崎遺跡（1）……7
第6図　南岩崎遺跡（2）……8
第7図　八幡陣屋跡周辺地形図……10
第8図　八幡陣屋跡（1）……11
第9図　八幡陣屋跡（2）……12
第10図　柏原遺跡群周辺地形図……16
第11図　柏原遺跡群……17

第１章　調査遺跡の位置と環境

今年度の対象遺跡は、市域の北部３カ所、南部１カ所の合計４カ所である。ここで、遺跡の位置と周辺環境の概略を記す。

奈良大仏台遺跡は、市域北端を東西に横断し東京湾に流れ込む村田川上流部を北に望む標高75m前後の台地上に存在する。本遺跡がある台地の東側は支流によって開析されている。周囲はまだ開発が疎らで調査遺跡の蓄積は多くないが、本遺跡北側750mをＡ地点、南側100ｍをＢ地点として、市道119号線改良工事に伴い発掘調査された奈良大仏台遺跡がある。調査の結果、縄文時代早期～中期を中心とした遺跡であることがわかり、陥し穴や土坑及び竪穴住居跡等が調査された。縄文時代の遺跡としては、下流に向かって北西約11ｋｍ程下った台地縁辺に草刈貝塚があり縄文時代中期の貝塚を伴う環状の集落が調査されている。また、Ａ地点では平安時代と考えられる竪穴住居跡も調査された。ちなみに、本遺跡周辺は「奈良」や「古都辺」といった字名が残っている。

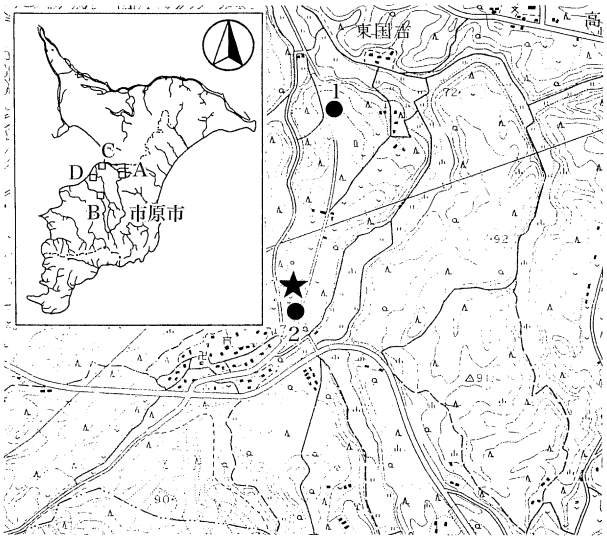
南岩崎遺跡は、市域をほぼ南北に縦走し東京湾に流れ込む、養老川の支流である戸田川を南に望む標高56ｍ前後の台地上に存在する。遺跡は調査前より古墳状のマウンドが確認されており、古墳の帰属時期の把握や周溝範囲の確認が調査の主な目的となった。周囲は市指定遺跡にもなっている吉野１号墳を中心とした吉野古墳群や本遺跡も含まれている南岩崎遺跡などが存在し、養老川中流域に展開した種々の古墳群の一角をしめるものである。東側約400mにおいて平成６年度に西国吉新林遺跡として吉野古墳群の一部が発掘調査され、周溝を含む全長15m前後の円墳(63号墳)が確認されており、出土遺物等から５世紀末～６世紀前半の築造と考えられる。そして代表的な古墳としては、北東側約600ｍに存在する吉野１号墳がある。墳丘長45mを測る前方後円墳であり、周溝部分が一部調査され埴輪片が出土した。6世紀前半頃の築造と考えられている。ちなみに、ほぼ同時期に東方約４ｋｍには多様な馬具や純金製の耳環が出土した、江子田金環塚古墳がかつて存在しており、この付近一帯における中期以降台頭してきた在地の有力な首長層の存在が想定される。

八幡陣屋跡は、東京湾の沖積地である「海岸平野」に位置し旧海岸線を西に200ｍ程のところに望む標高3m前後の沖積低地上に位置する。周囲は南西約350mに飯香岡八幡宮があり、社伝によると白鳳年間の開基とされているが、少なくとも天正期以降、八幡宮周辺は宿場町的な景観を形成していったと思われる。寛文～元禄年間に堀家・大久保家が相前後し、小大名として当地周辺に陣屋を構えたという伝承が残っており、本遺跡はその推定地の一角をなすことから陣屋関連の遺構の存在有無の確認が調査の主な目的となった。

柏原遺跡群は、市域南部の姉崎周辺を流れ東京湾に注ぎ込む養老川の支流今津川を北に望む標高６ｍ前後の微高地上に位置する。古墳～奈良・平安時代の周知の遺跡範囲として登録されており、遺跡周辺は当該期の遺構の存在が考えられた。ちなみに、西側約１ｋｍの砂堆上に全長106ｍを測り、５世紀中頃の築造と考えられる二子塚古墳がある。石枕や鏡・首飾り等豊富な遺物が出土している。

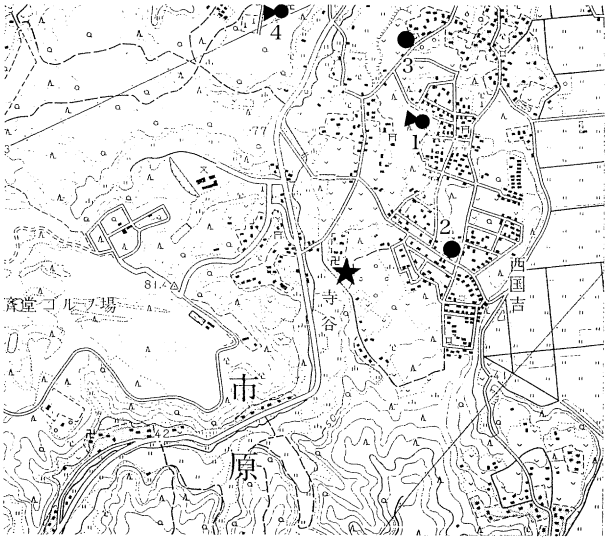
＜参考文献＞

市原市教育委員会『千葉県市原市埋蔵文化財分布地図　北部編・南部編』1988



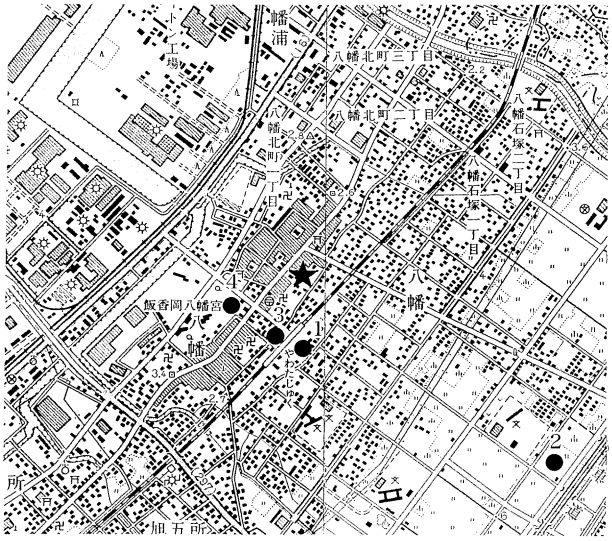
A．奈良大仏台遺跡
★　調査区
1．奈良大仏台遺跡（A地点）
2．奈良大仏台遺跡（B地点）

奈良大仏台遺跡 1992　（財）市原市文化財センター



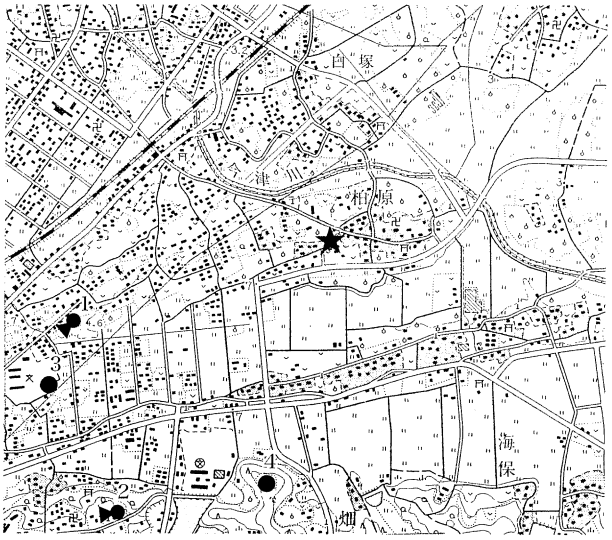
B．南岩崎遺跡
★　調査区
1．吉野1号墳
2．吉野63号墳
3．南岩崎遺跡
4．報恩寺3号墳

吉野1号墳・南岩崎遺跡 1987　市原市教育委員会
西国吉新林遺跡　　1994　市原市教育委員会



C．八幡陣屋跡
★　調査区
1．八幡御墓堂遺跡
2．市原条里制遺跡
3．霊応寺跡
4．飯香岡八幡宮

市原条里制遺跡　1998　（財）千葉県文化財センター
八幡御所跡推定地 1999　（財）市原市文化財センター



D．柏原遺跡群
★　調査区
1．姉崎二子塚古墳
2．姉崎天神山古墳
3．姉崎山新遺跡
4．畑木城跡

千葉県重要古墳群測量調査報告書 1994　千葉県教育委員会
　　―市原市姉崎古墳群―
千葉県所在中近世城館跡詳細分布調査報告書Ⅱ 1996
　　―旧上総・安房国地域―　　千葉県教育委員会

第1図　調査区の位置と周辺の遺跡（1：25,000）

第２章　奈良大仏台遺跡

調査概要

今回の調査区は、市原市北東部に位置し、北側約 3.5㎞ 先には千葉市との境を流れる村田川がある。調査期間は、平成 13 年 4 月 9 日～ 4 月 12 日であった。

立地は、村田川支流によって樹枝状に開析された谷津を、東側に望む標高 74 m前後の台地上に位置するが、縁辺より 100 m程内陸に入り込んだ場所にある。周囲はあまり開発の手が延びず、遺跡が比較的保存されていると考えられる半面、調査の蓄積があまりない場所でもある。

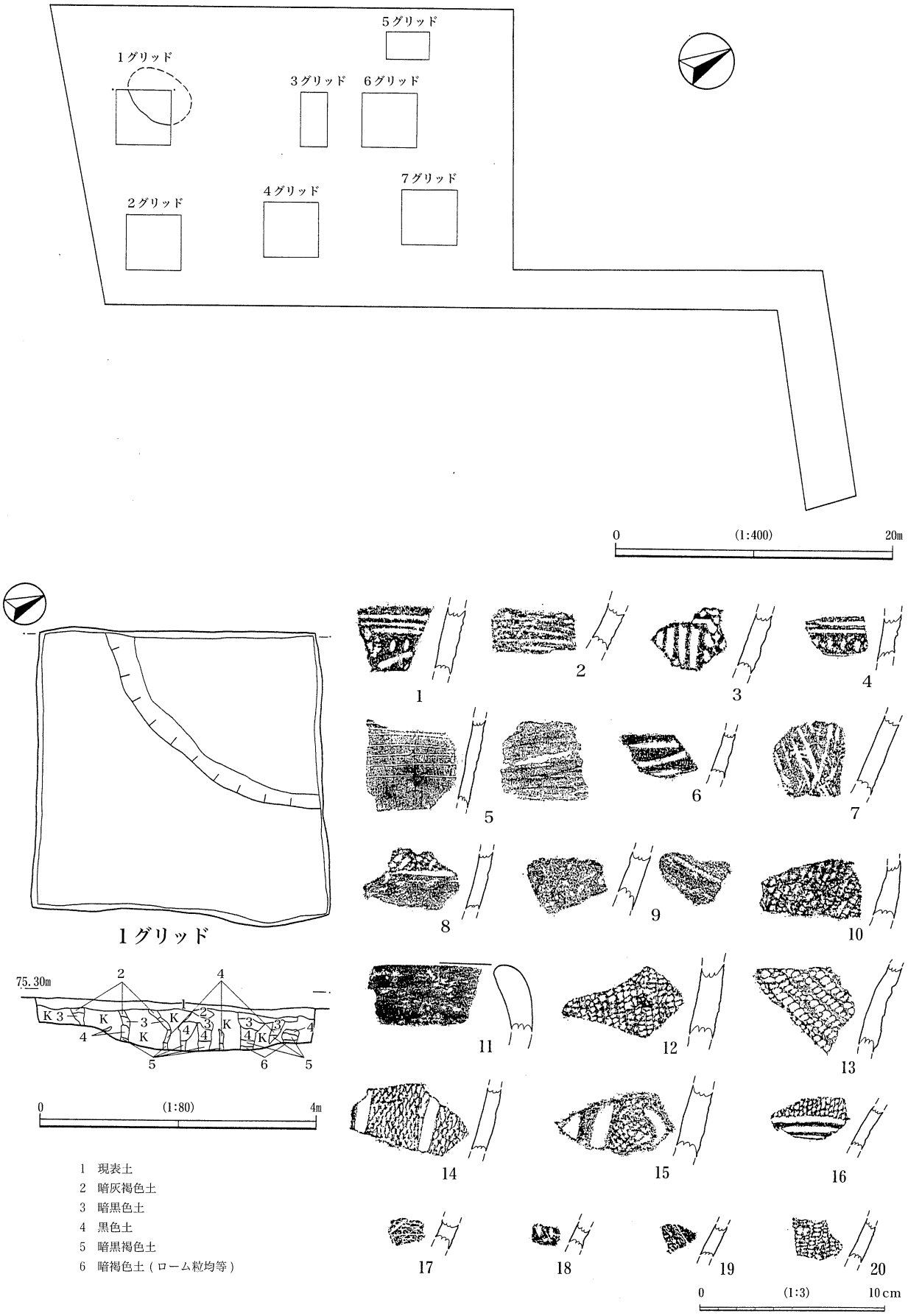
奈良大仏台遺跡としては、市道 119 号線の改良工事に伴って、北側約 750 mをＡ地点、南側約 100 mをＢ地点としてそれぞれ発掘調査が行われている。

Ａ地点では、縄文時代早期撚糸文系土器や中期加曽利Ｅ式土器が出土し早期の陥し穴や中期の竪穴住居跡が検出された。また、8 世紀末～ 9 世紀と考えられる竪穴住居跡も検出された。

Ｂ地点では、早期撚糸文系土器が出土し当該期の土坑等が調査された。

今調査区周辺では、早期及び中期の土器片を表採することができるため、該当時期の遺構が確認されることが考えられた。

第２図　奈良大仏台遺跡周辺地形図（1：5,000）


5グリッド
1グリッド
3グリッド
6グリッド
7グリッド
4グリッド
2グリッド
0
(1:400)
20m
1グリッド
75.30m
0
(1:80)
4m
1 現表土
2 暗灰褐色土
3 暗黒色土
4 黒色土
5 暗黒褐色土
6 暗褐色土（ローム粒均等）
0
(1:3)
10cm

第３図　奈良大仏台遺跡

調査方法（第３図）

４×４ｍを中心とした調査グリッドを調査区全体に任意に７カ所設定し、遺構の有無を確認した。不明確なものについては一部掘り下げその性格と帰属時期を把握するようにした。

遺構と遺物（第３図）

確認面は、耕作による攪乱が著しく遺構の検出は極めて困難な状況であった。遺構としては、１グリッドにおける土坑以外、遺構と認識されるものは確認されなかった。

１グリッド

グリッド北側において、土坑が確認された。表土から確認面までの深さは約40㎝である。確認面から土坑底面までの堀り込みは約30ｃｍ程でなだらかな落ち込みである。

遺物は極めて少なく破片資料のみであり、トレンチャーによる破壊が極めて著しいため、本遺構に伴う遺物であるとも言い切れないが、敢えて掲載すれば出土遺物としては、縄文時代早期沈線文系と思われる土器片17が出土している。

新しい時期の落ち込みではないが、現状では時期不明土坑と言わざるを得ない。

その他の出土遺物（第３図）

その他の遺物としては、本調査区周辺の畑地等から早期沈線文系土器片１～９、前期土器片10及び中期加曽利Ｅ式期11～16の土器片を表採した。

また、4グリッドから早期土器片18,19、6グリッドから単節RLの縄文土器片20が出土したので掲載しておく。

小結

今回の調査区は、耕作による確認面の攪乱が極めて著しく、遺構の破壊による消滅の可能性も考えられたが、各グリッドの出土遺物が殆どなく、隣接して過去に調査が行われたＢ地区での遺構分布を考えると、当初より遺構の密度は高くなかったと考えざるを得ない。

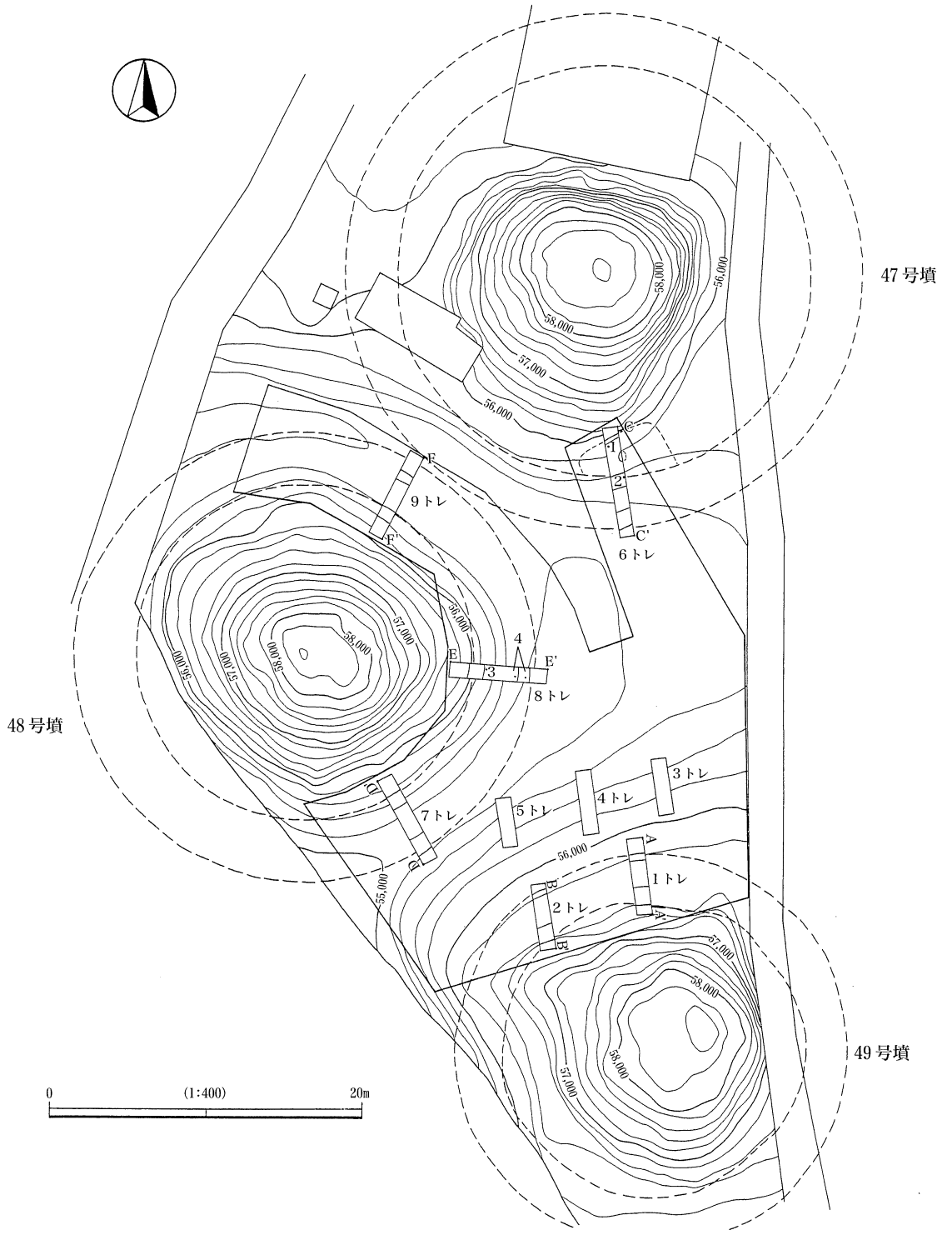
第３章　南岩崎遺跡

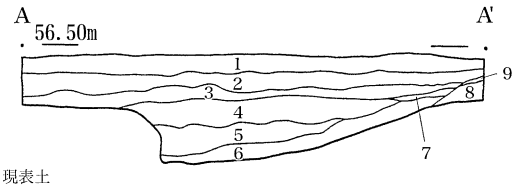
調査概要

南岩崎遺跡は、養老川中流域左岸を望み、西は支流戸田川、東は西国吉川によって独立丘状に開析された標高56ｍ前後の台地ほぼ全面に展開しており、この台地両側を流れる河川に面する縁辺上に古墳群が存在している。現在視認されているだけで径15～20ｍ前後の円墳を中心に63基ほどが連なるようにして形成されている。当地周辺は、市北部にある菊間地方を中心とした村田川中流域に展開する「菊間古墳群」、市南部の姉崎地方を中心とした養老川下流域及び椎津川周辺に展開する「姉崎古墳群」を築造した両国造に挟まれる立地条件にあり、中期以降台頭してきた在地の首長層によって築造された古墳群であると考えられている。いわゆる養老川中流域に存在するこれらの古墳群は、金環や馬具等の鉄器を豊富に出土した、墳丘長45ｍを測る6世紀前半と考えられる江子田金環塚古墳や、同じく後期の築造と考えられ埴輪片が出土した全長45ｍを測る吉野1号墳等の前方後円墳が一部に存在するものの、多くは径15～20ｍ程度の円墳を中心に構成されている。

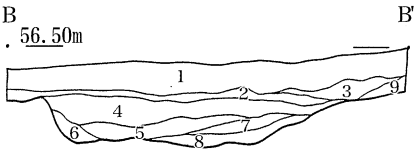
今回の調査は、南岩崎遺跡にある吉野古墳群内で、墓地造成がされることに伴い行われた。期間は、平成13年4月16日～4月20日で、遺跡台帳には、吉野古墳群47･48･49号墳と周知されている。立地は、養老川中流域に流れ込む支流戸田川を眼下に望む標高56ｍ前後の台地上に南側縁辺に沿って展開している。今回は、墳丘部分の削平は免れるものの周溝部分は墓地造成が行われるため、確認トレンチを入れて、周溝の範囲確認及び帰属時期の把握を行うものである。

第４図　南岩崎遺跡周辺地形図（1：5,000）





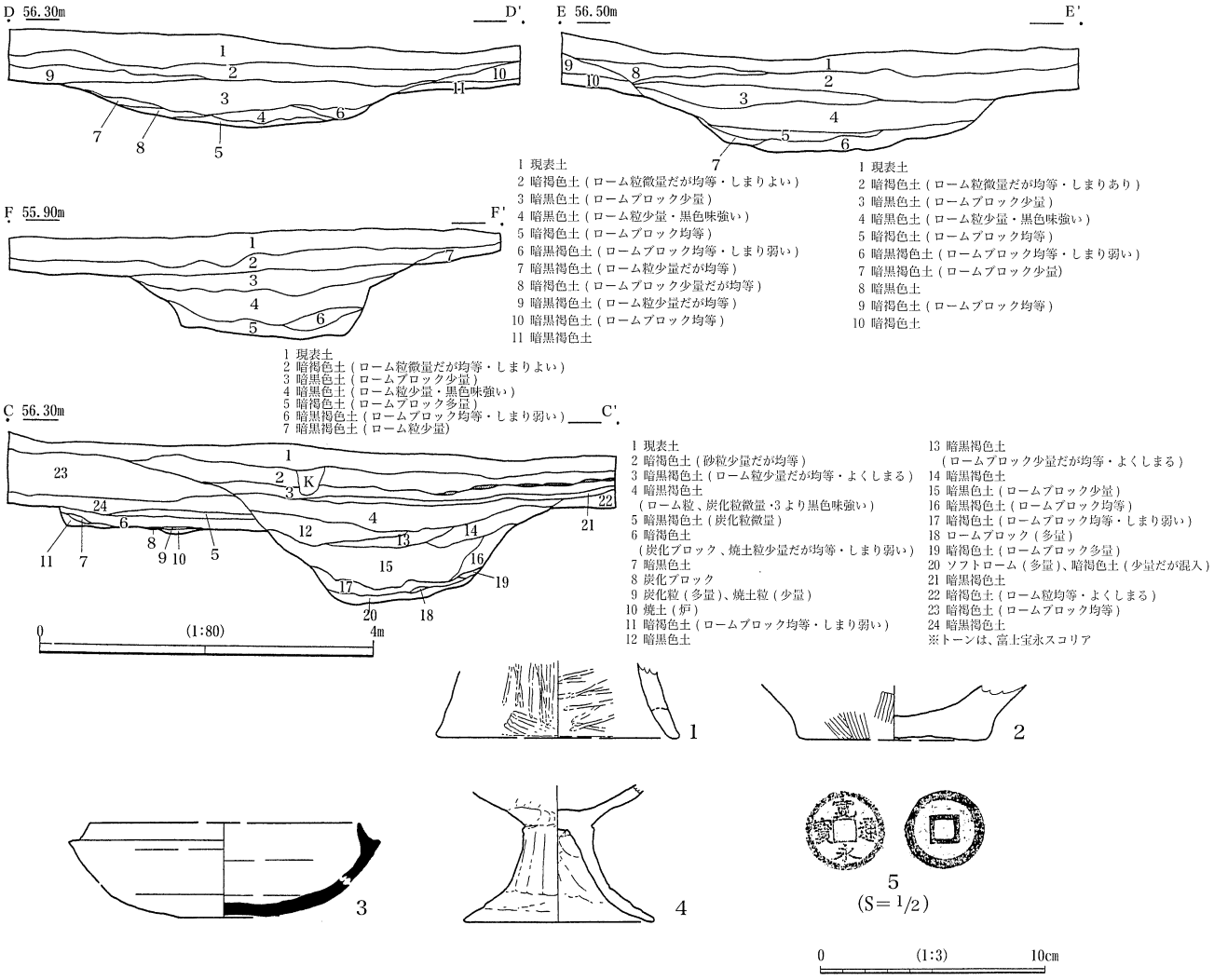
1 現表土
2 暗褐色土
3 暗黒褐色土（ローム粒少量だが均等・よくしまる）
4 暗黒色土（ローム粒少量・黒色味強い）
5 暗黒褐色土（ローム粒微量）
6 暗褐色土（ローム粒多量・しまり弱い）
7 暗黒色土
8 暗褐色土（ローム粒均等）
9 暗黒褐色土（ローム粒均等）



1 現表土
2 暗褐色土
3 暗黒色土（ローム粒少量・黒色味強い）
4 暗黒褐色土（ローム粒微量）
5 暗褐色土（ローム粒均等）
6 暗褐色土（ローム粒均等・黒色味やや強い）
7 暗褐色土（ローム粒多量・しまり弱い）
8 暗褐色土（ローム粒きわめて多量）
9 暗褐色土（ローム粒均等）

0 (1:80) 4m

第５図　南岩崎遺跡（１）



第６図　南岩崎遺跡（２）

調査方法（第５図）

２×５ｍを中心とした調査トレンチを調査区全体に任意に９カ所設定し、遺構の有無・周溝の範囲確認・帰属時期の把握を行った。不明確なものは一部掘り下げて、その性格と帰属時期を把握した。

遺構と遺物（第５・６図）

古墳時代後期に比定される古墳３基の周溝、古墳時代前期と考えられる竪穴住居跡１軒が確認された。遺構が確認されていない調査区中央は表土直下の堆積層が極めて薄く硬質ローム面が露出しており、墳丘築造に伴う土取りや、近年までの墓地形成に伴う削平が行われたと考えられる。遺物は、8トレンチにおいて須恵器杯3，高杯4、6トレンチにおいて台付甕1，甕2が出土した。また、調査区一括遺物として寛永通宝5が出土している。

１トレンチ

トレンチ中央において、吉野49号墳周溝が確認された。表土から確認面までの深さは約60cmである。上幅は3.3ｍを測り、確認面から周溝底面までの堀り込みは約60cmである。遺物は少なく、破片資料のみで特に図示できるものはなかった。

２トレンチ

トレンチ中央において、吉野49号墳周溝が確認された。表土から確認面までの深さは約50cmである。上幅は3.3ｍを測り、確認面から周溝底面までの堀り込みは約50cmである。遺物は少なく、破片資料のみで特に図示できるものはなかった。

３トレンチ～５トレンチ

トレンチは、いずれも表土より 15 ～ 20cm 程度で硬質ローム面が露出し、遺構の存在は確認されなかった。

６トレンチ

トレンチ内南側部分より、吉野 47 号墳周溝が確認された。表土から確認面までの深さは約 70cm である。上幅は 3.5 ｍを測り、確認面から周溝底面までの堀り込みは約 1 ｍである。図示できる遺物は出土しなかったが、周溝断面の形状等から判断して後期古墳と考えられる。また、周溝に切られるようにして北側部分に竪穴住居跡が確認された。住居の掘り込みは 20cm 程度と遺存状態は良くない。

遺物は、住居内北側の壁付近下層で台付甕の台部 1 が出土している。他には、周溝部分との境付近で甕片 2 が出土している。遺物や、住居内の構造等から本遺構は古墳時代前期と考えられる。

７トレンチ

トレンチやや南よりにおいて、吉野 48 号墳周溝が確認された。表土から確認面までの深さは約 50 ～ 60cm である。上幅は 4.3 ｍを測り、確認面から周溝底面までの堀り込みは約 50cm である。遺物は少なく破片資料で特に図示できるものはなかった。

８トレンチ

トレンチ内中央において、吉野 48 号墳周溝が確認された。表土から確認面までの深さは約 50cm である。上幅は 4.2 ｍを測り、確認面から周溝底面までの堀り込みは約 60cm である。

遺物は、周溝西側底面立ち上がり部分の下層において、須恵器杯 3 が出土した。また、高杯 4 が周溝東端付近下層において出土している。出土遺物及び周溝断面の形状等から判断して後期古墳と考えられる。

９トレンチ

トレンチ中央において、吉野 48 号墳周溝が確認された。表土から確認面までの深さは約 45cm である。上幅は 3.4 ｍを測り、確認面から周溝底面までの堀り込みは約 80cm である。遺物は少なく破片資料で特に図示できるものはなかった。

小結

今回の調査の主要な目的は、吉野 47･48･49 号墳の帰属時期の把握と周溝規模の確認にあったが、狭小なトレンチ確認とサブトレンチのみの掘り下げしかできなかったため、遺物は 48 号墳しか出土しなかった。つまるところ、47･49 号墳は群集墳であるという状況と周溝断面の形状等からしか判断できないが、後期の所産と考えられる。他には、47 号墳墳丘下に前期の竪穴住居跡が確認された 。調査区は、墳丘部分は比較的保存状態は良かったものの、それ以外の範囲は以前に行われた墓地形成によって削平されており、中央に設定した 3 ～ 5 トレンチについては遺構は全く確認されず、表土より 15 ～ 20cm 程度でハードローム面が露出する状態であった。現状で、6 トレンチソフトローム確認面より 60cm 程度中央部が凹状に下がっており、古墳築造に伴う土取りの影響も無視できないが、古墳時代以降の遺構も確認できないことから近年までの墓地形成によって削平されたと考えられる。

第４章　八幡陣屋跡

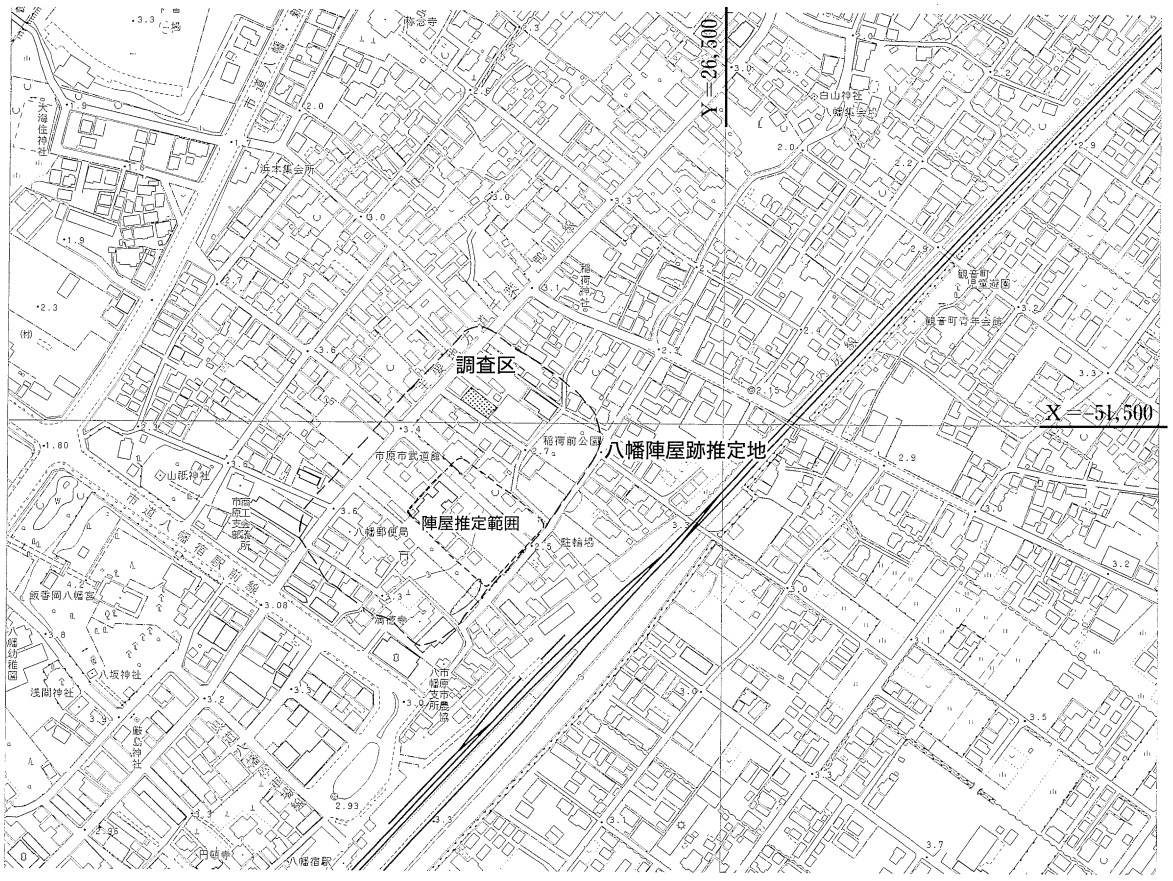
調査概要

調査区は、ＪＲ内房線八幡宿駅から北へ約 300 mにある。周囲は、西へ 200 m程のところに東京湾旧汀線が走り、南西約 350 mに飯香岡八幡宮が鎮座している。現場は、市北部村田川河口付近から、東京湾岸沿いに縦走する海岸平野のほぼ中央部に位置する。調査期間は、平成 13 年 5 月 14 日～ 5 月 16 日であった。

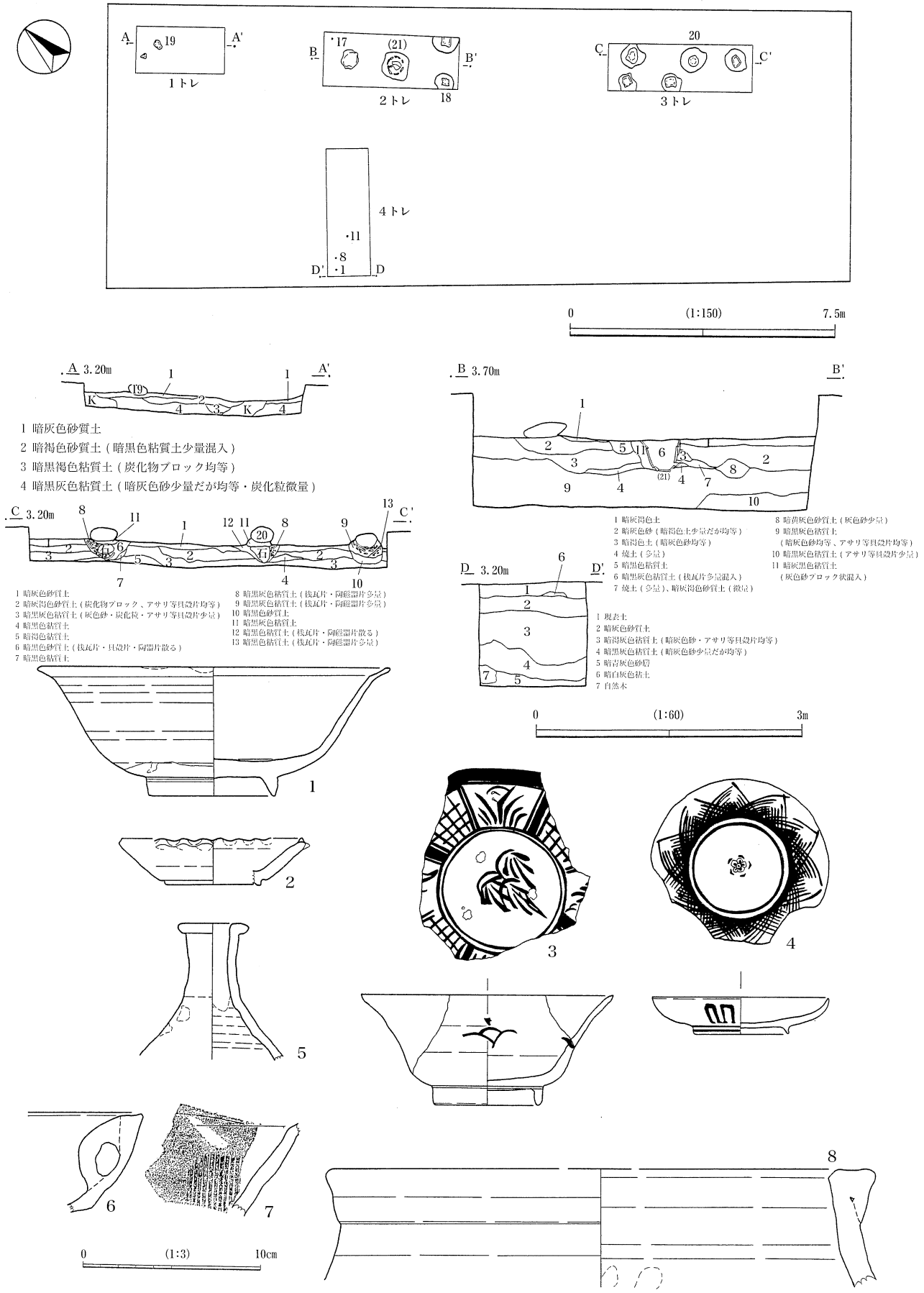
当地の古くは、天正年間頃より飯香岡八幡宮の宿場町的な景観を有していたと考えられており、現在、周囲は建物が密集している。記録・伝承では、この地周辺に江戸時代前期の寛文～元禄期、堀家・大久保家の陣屋が置かれていたとされ、今回の調査は「八幡陣屋跡推定地」内における開発行為に伴い、その陣屋関連遺構の確認及び広がり・帰属時期の把握等が求められた。

ここで、「市原市史」において記述されている「八幡陣屋跡」について若干補足すると、1668 年（寛文 8）または、1687 年（貞享 4）に上総夷隅や市原及び越後刈羽等計 1 万石を所領にもつ堀　直良が居所を夷隅郡刈谷（夷隅町）から市原郡八幡村に移し、八幡藩が成立したとある。しかし、具体的に八幡村の何処に居所を設けたのかは不明であるという。ちなみに、家督を継いだ直宥は 1698 年（元禄 11）越後沼垂郡椎谷（現新潟県柏崎市）に転封となり、（堀家）八幡藩は廃藩となった。

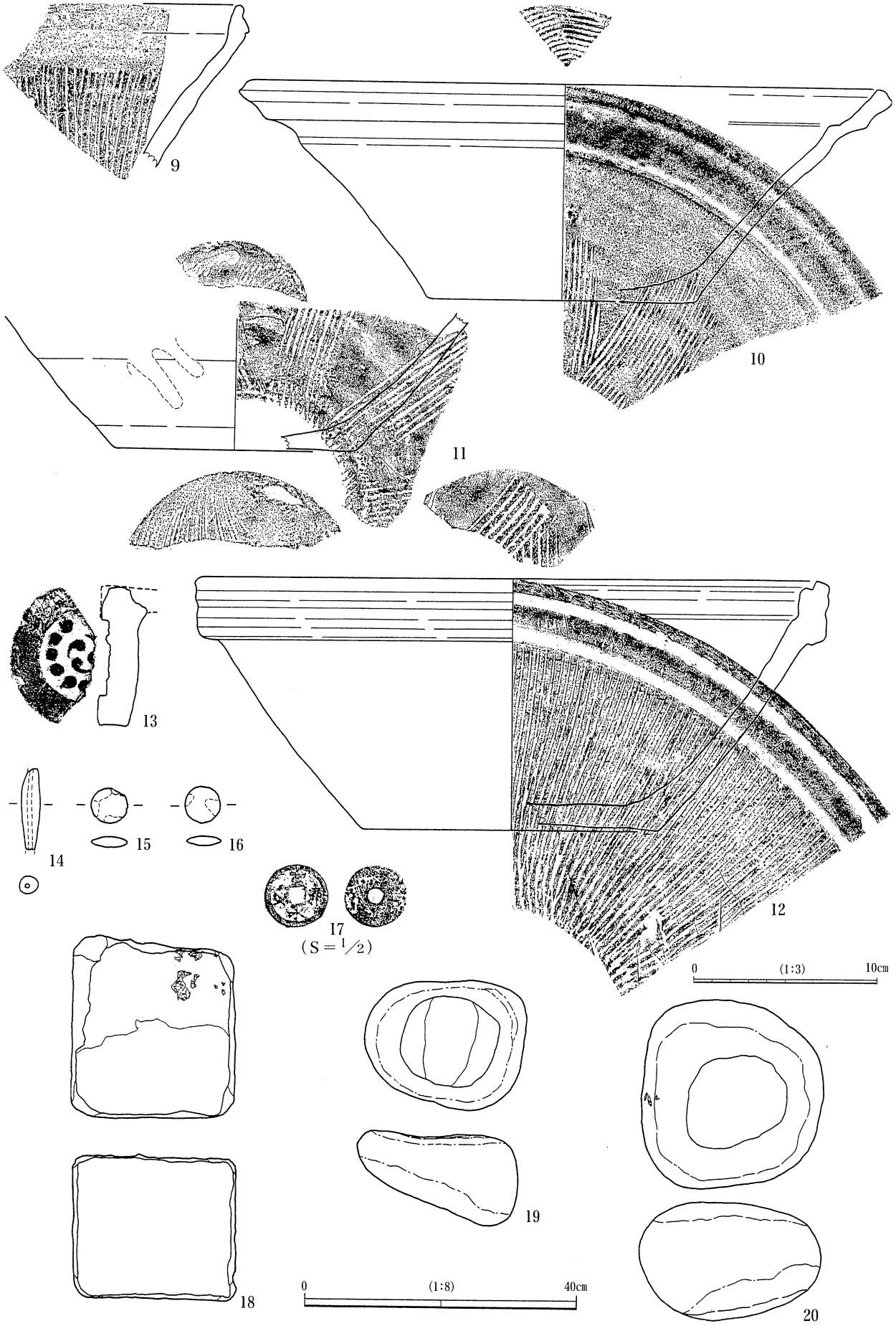
一方、「市原郡誌」によるとほぼ同時期にあたる 1686 年（貞享 3）大久保忠高が八幡村仲町に陣屋を設けたとある。「市原市史」では、忠高は当初 1500 石知行の旗本であったが異例の昇進を続け、武蔵や上



第７図　八幡陣屋跡周辺地形図（1：5,000）


1トレ
2トレ
3トレ
4トレ
(1:150)
7.5m
A 3.20m
B 3.70m
C 3.20m
D 3.20m
1 暗灰色砂質土
2 暗褐色砂質土（暗黒色粘質土少量混入）
3 暗黒褐色粘質土（炭化物ブロック均等）
4 暗黒灰色粘質土（暗灰色砂少量だが均等・炭化粒微量）
(1:60)
3m
(1:3)
10cm

第８図　八幡陣屋跡（１）



第９図　八幡陣屋跡（２）

総の所領7000石と蔵米3000石で計1万石の小大名となり、その直前に八幡村に陣屋を創設したという。そして、1697年(元禄10)転封となり(大久保家)八幡藩も廃藩となった。

しかしながら、当該期に両家が相前後して、八幡に居所を構えたという具体的な確証は殆どないのが現状であると言わざるを得ない。ちなみに、「市原市史」によると1691年(元禄4)飯香岡八幡宮の幣殿・拝殿造営に際しての「飯香岡八幡宮文書」に堀家・大久保家の記載があるとされている。

さて、今調査区周辺が「八幡陣屋跡推定地」になっている根拠であるが、南側約150mの地点に土塁状の高まりが存在することと、「仲町」という現存する字名と一致すること等による。

また、隣接地に居住する鈴木康夫氏所蔵の江戸時代後期(文化年間)の絵図面(後述)が今回の調査時に発見され、当地周辺の地籍図・地番図と一部比較的近似する箇所があり、検討の余地は多々あろうが敢えて推測するならば、今調査区に隣接する南側(内側破線内)が陣屋本体である可能性が考えられる。

調査方法（第８図）

1.5×4mを中心とした調査トレンチを調査区全体に任意に4カ所設定し、遺構の有無を確認した。不明確なものについては一部掘り下げその性格と帰属時期を把握するようにした。

遺構と遺物（第８・９図）

結論から言うと、今回の調査では八幡陣屋跡関連と想定されるような遺構の存在は、確認されなかった。断面観察をすると、現表土の下に層厚40cmにわたって貝殻片を均等に含む暗褐灰色シルト質粘質土層が堆積しており近世層と考えられるが、近世以前の旧地形は、湿地に近い状態にあった可能性があり、地盤安定のため貝を均等に含む土壌で整地作業を行った可能性がある。

その貝殻片を均等に含む近世層の下層の暗黒灰色粘質土層内に、16世紀戦国期後半と思われる常滑系の甕口縁部が出土したが、遺構に伴うものではない。そして、近世層の上面に礎石建建物跡に伴う礎石が出土したが、礎石埋没防止のために下に敷かれていた陶磁器片は幕末～近代以降のものを多く含んでいる。

１トレンチ

トレンチ北西側において、礎石が2個出土した。礎石建建物の礎石と考えられ、表土から確認面までの深さは約20cmである。礎石は、周囲を特に掘り込まず、旧地表面に置かれた状況で確認された。

周囲は、以前の建築物によって攪乱が著しい。遺物は確認面全体に散乱しており、幕末～近代以降の陶磁器片や瓦片が主体を占める。礎石19を掲載する。重量は8.0kgである。柱が置かれたと思われる上面は中央部がやや凹状にくぼんでいる。

２トレンチ

3個の礎石が出土した。礎石建建物の礎石と考えられ、表土から確認面までの深さは約40cmである。北側の礎石は、周囲を特に掘り込まず、旧地表面に置かれた状況で確認された。南東側に2つ並んでいる礎石は20～25cm程度の正方形を呈し、砂岩質である。18を図示する。重量は18.0 kgを計る。礎石周囲を50～70cm程円形に掘り込んだ後、細かく破砕した貝殻片と暗黒褐色土に灰色砂を少量含む土とで互層に版築状に突き固めて礎石を設置しており、近代以降における礎石建建物の構造の一端を示していると考えられる。北側にある礎石とは異なる建物の礎石と考えられる。

中央付近の確認面上では甕(21)が出土した。常滑系の大甕で、周囲を円形に深さ40cm程掘り込んでおり、下半部が据え置かれていた。上半部は欠損しているが、現存の器高は約80cmを測る。19世紀頃ま

で遡るであろうか。

遺物は、1トレンチ同様、確認面ほぼ全面に散乱している。大半が、幕末～近代以降の陶磁器片や瓦片であるが、その中に近世まで遡るであろう遺物も含まれている。2は、瀬戸・美濃系の陶器皿であり16世紀後葉まで遡ると考えられる。口縁部は輪花状を呈し高台は削り出しで、全面鉄釉を施す。5は、瀬戸・美濃系の徳利で上半部のみ残存する。17世紀末～18世紀初頭と考えられる。10は、17世紀後葉と思われる瀬戸・美濃系擂り鉢である。擂り目の摩耗が殆どなく、あまり使用されないまま、廃棄されたと思われる。12は、堺産と思われる炻器の擂り鉢である。近世期の遺物であろう。17は、寛永通宝である。他には、おはじき15(重量1.8g)・16(重量2.1g)が、出土している。ほぼ完存しており、両面に指頭痕が明瞭に残る。

3トレンチ

合計5個の礎石が出土した。礎石建建物の礎石と考えられ、表土から確認面までの深さは約20cmである。南西側トレンチ壁付近に並ぶ2つの礎石は、25～30cm程度の正方形を呈し、砂岩質である。北東側に3つ並ぶ礎石とは異なる建物の礎石と考えられる。2トレンチの方形礎石と同様に、周囲を掘り込んだ後、細かく破砕した貝殻片と暗黒褐色土に灰色砂を少量含む土とで互層に版築状に突き固めて礎石を設置している。同一建物になる可能性もある。

一方、北東側に3つ並ぶ礎石は、周囲を円形に掘り込んでおり、確認面上にある礎石の下に陶磁器片・瓦片及び沈下防止用の根石を敷いて礎石が沈下するのを防いでいる。20を図示する。重量は20.8kgを計る。礎石が2時期にわたって存在していた可能性もないわけではないが、断面観察から、2時期に分かれて建物が存在した可能性は低いと思われる。

沈下防止に用いられた陶磁器片は幕末～近代以降のものが多く含まれており、本建物は少なくとも近代以降と言わざるを得ない。その中に、近世まで遡る遺物としては、焙烙片6が出土している。雲母粒を多く含んでいる。また、信楽系と思われる擂り鉢9が出土している。9は擂り目の摩耗が観察されず、殆ど使用されないまま廃棄されたと思われる。他のトレンチ出土遺物は、19世紀前～中葉と思われる磁器鉢3や18世紀中～末の肥前系磁器と思われる皿4及び、17世紀後葉と思われる瀬戸・美濃系の擂り鉢片7が含まれている。また、一方、軒丸瓦片13、管状土錘14(重量3.3g)が出土しているが近代以降のものと思われる。また、確認面にこれらが混在して廃棄されている中に鋳造関連と考えられる羽口片や炉壁片等が含まれていた。周囲に鋳造施設等の存在があったかもしれない。

4トレンチ

このトレンチは、礎石等の存在が確認されなかったため、下層の遺構の有無等を把握する目的から掘り下げた。その結果、表土より1m程度下から青灰色の砂層が現れ、これが基盤層であると考えられる。沖積層特有の微起伏は観察されたが、遺構は確認されなかった。

しかし、遺物は青灰色砂層の直上層で、戦国期後半16世紀まで遡る遺物が出土し、周囲に当該期遺構の存在を示唆した。8は、常滑系の甕口縁部で、口縁部の形状等から16世紀中頃まで遡ると考えられる。11は、瀬戸・美濃系擂り鉢で、近世期の遺物と考えられる。1は、唐津焼と考えられる鉢で17世紀中頃～後半になると思われる。

小結

今回の調査区は、「八幡陣屋跡推定地」の北側端部に位置し、陣屋関連遺構の存在が考えられたが、当該遺構の存在は確認されなかった。ちなみに、当調査区周辺で近代において醤油関連工場や第九十

八銀行八幡支店の存在を指摘する資料があり、遺物からはその手がかりは見つからなかったものの、確認された礎石建建物との関連性を考えられるであろうか。

最後に、紙幅はないが、図版1に市原市八幡在住　鈴木康夫氏所蔵の、江戸時代19世紀初頭の文化6年(1809)改とされている「御陳(陣)家屋敷ノ絵図」が調査中に発見されたので、掲載する。

本資料は一部現地形と比較的近似している箇所があり、検討の余地は多々あろうが、地籍図・地番図とも参照のうえ地形図に陣屋本体の推定範囲を内側破線で示した。現地は、東側に流れている水路が複雑にクランクしている。

この「御陳(陣)家屋敷ノ絵図」は、上の絵図が写しと記載されている。道・川・沼・竹山等、地目別に着色を異にしており、本絵図が藍色主体、写しが黄色主体で着色されている。西に「往来」と書かれているのは「房総往還(現旧道)」と思われる。その「往来」から陣屋へと続く道の入り口には、切り妻様の覆い屋のようなものが建っており、なかに2つの高札のようなものが「往来」に面して立っているように見える。

さて、この絵図の性格、及び作られた意図であるが、ほとんど不明であると言わざるを得ない。しかし、書かれた墨書から敢えて私見を述べるならば、(管理を任されていた)時の名主「太右衛門」が、その地所を地目別に色分けし面積を記載して、その何らかの代金(管理料？)を、文化12年(1815)に何れかの人物(大久保家か)に対して何らかの証明とするために、図化したとも考えられる。

資料が断片的なため、その全体の経緯を知る由もないが、房総往還(現旧道)である「往来」に長地状に並んで面している「永井(様組)」「岩本(様組)」姓は、江戸期を通じて当地周辺を領していた旗本の姓名と一致していると思われる。

つまり、少なくとも「陣屋」が置かれていたとされている貞享～元禄期より100年以上経った後には、寛永期頃より周辺を領している旗本に関連する地名が、陣屋本体を避けるようにして「往来」(房総往還)沿いに、存在していたことは明らかなようである。

いずれにしても、この程度の情報しか現段階ではわからない。「御陳(陣)家屋敷ノ絵図」を見る限り、周囲は沼地等の記載が多い。大久保氏は定府大名で、八幡を訪れることは稀であったというが、かつて庭園等が存在していた可能性は考えられないであろうか。

あらためて鈴木氏には、本資料の借用・掲載を快く承諾していただいたことに謝意を表します。

第５章　柏原遺跡群

調査概要

今回の調査区は、養老川水系より発する支流今津川中流域を北に 200 mのところに望む標高６m前後の微高地上に位置する。調査期間は、平成 13 年７月 23 日～７月 25 日であった。

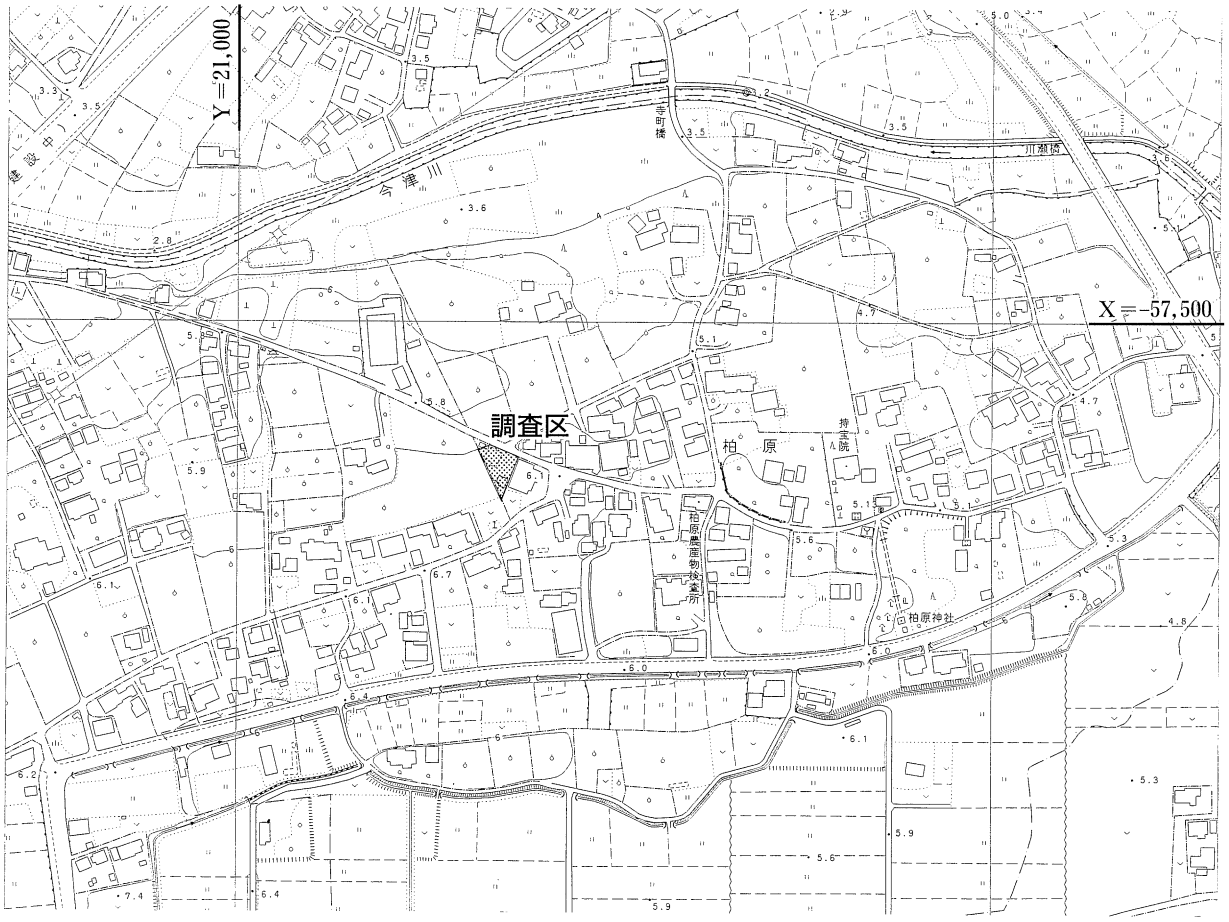
地形は、西側約１㎞にある二子塚古墳が築造された、東京湾旧海岸線に併走する砂堆列と南西部分はつながっているが、東から北は今津川によって開析され、独立した微高地状となっている。

調査区は、その中央部付近にあり１トレンチに見る堆積土は灰色砂を基本としている。

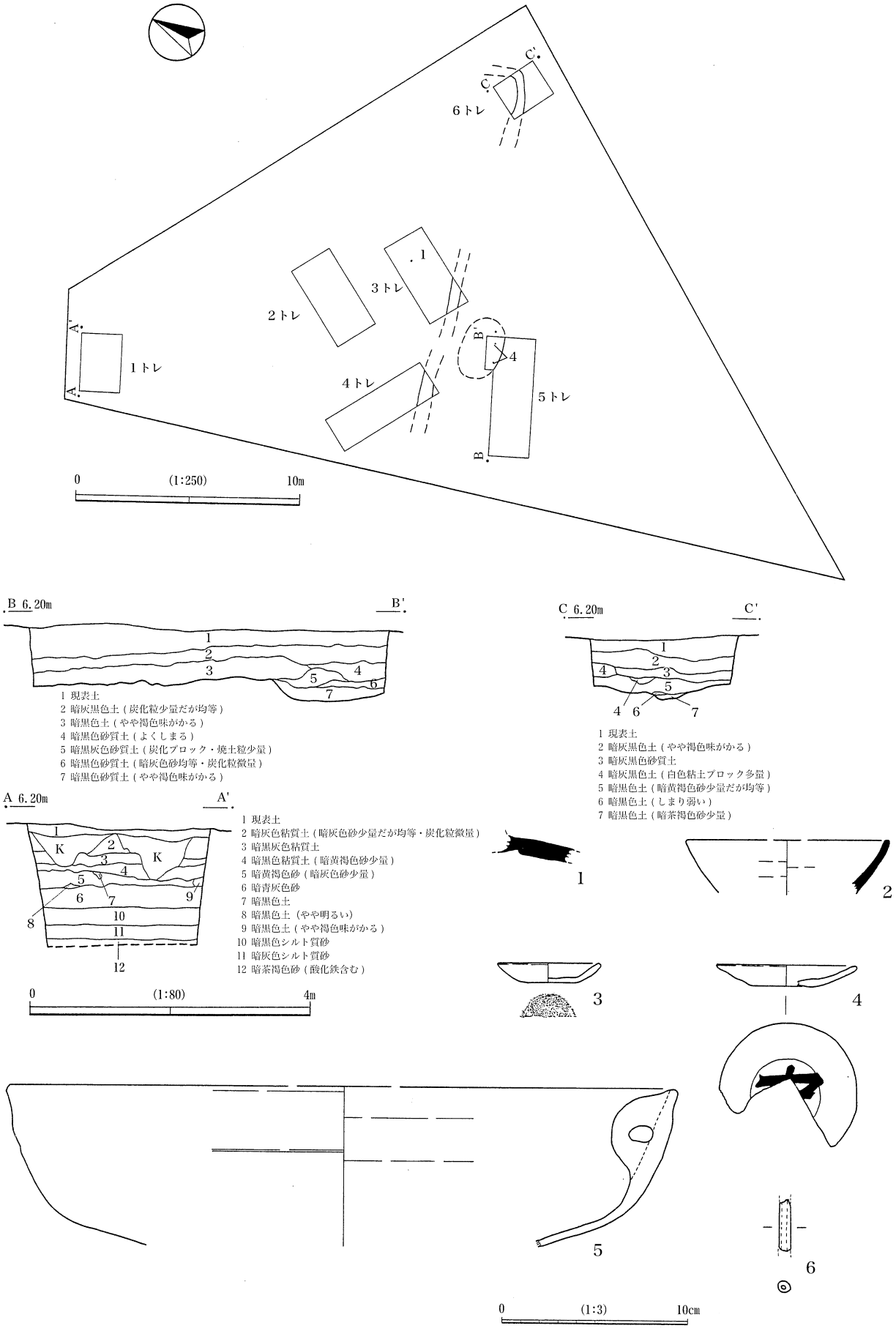
遺跡周辺は、水はけのよい砂地の立地条件を利用した梨栽培が栄んであり、その表土より土師器片がわずかながら見られた。今回の調査範囲が、古墳～奈良・平安時代の周知の遺跡範囲に入っているため、沖積低地における当該期遺構の存在の把握が今回調査の主要な目的となった。

調査方法（第 11 図）

調査区が不整な三角形を呈し、調査後の住宅建築に伴う制約から必ずしも均等にトレンチを配置することはできなかったが、２×４mを中心とした調査トレンチを調査区全体に任意に６カ所設定し、遺構の有無を確認した。不明確なものについては一部掘り下げ、その性格と帰属時期を把握するようにした。



第 10 図　柏原遺跡群周辺地形図（1：5,000）


6トレ
C
C'
1
3トレ
2トレ
A
A'
1トレ
B'
4
4トレ
5トレ
B
0
(1:250)
10m
B 6.20m
B'
1 現表土
2 暗灰黒色土（炭化粒少量だが均等）
3 暗黒色土（やや褐色味がかる）
4 暗黒色砂質土（よくしまる）
5 暗黒灰色砂質土（炭化ブロック・焼土粒少量）
6 暗黒色砂質土（暗灰色砂均等・炭化粒微量）
7 暗黒色砂質土（やや褐色味がかる）
C 6.20m
C'
1 現表土
2 暗灰黒色土（やや褐色味がかる）
3 暗灰黒色砂質土
4 暗灰黒色土（白色粘土ブロック多量）
5 暗黒色土（暗黄褐色砂少量だが均等）
6 暗黒色土（しまり弱い）
7 暗黒色土（暗茶褐色砂少量）
A 6.20m
A'
K
1 現表土
2 暗灰色粘質土（暗灰色砂少量だが均等・炭化粒微量）
3 暗黒灰色粘質土
4 暗黒色粘質土（暗黄褐色砂少量）
5 暗黄褐色砂（暗灰色砂少量）
6 暗青灰色砂
7 暗黒色土
8 暗黒色土（やや明るい）
9 暗黒色土（やや褐色味がかる）
10 暗黒色シルト質砂
11 暗灰色シルト質砂
12 暗茶褐色砂（酸化鉄含む）
0
(1:80)
4m
1
2
3
4
5
6
0
(1:3)
10cm

第11図　柏原遺跡群

遺構と遺物（第11図）

結論から言うと、今調査区における各トレンチにおいて、出土遺物がきわめて僅少で破片資料のみであることから、明確に遺構であると断言できるものは確認されなかった。トレンチによっては、暗黒色シルト質砂質土が土坑状に堆積している箇所もあったが、遺構とする根拠に乏しく、沖積地特有の旧表土面の微起伏と判断せざるを得なかった。

3トレンチ

トレンチ南側コーナー付近において、溝が確認された。表土から確認面までの深さは約1mである。確認面から溝底面までの堀り込みは18cmである。遺物は、トレンチ北東寄り確認面上において、須恵器長頸壺の胴部上端部1が出土した。頸部との接合が3段構成で接続されていると考えられる。遺構に伴うものではないが、今後周辺地域に調査範囲が広がれば新たな手がかりがつかめるかもしれない。他には、一括遺物として管状土錘6(重量1.3g)が出土している。

4トレンチ

トレンチ南側コーナー部分において、溝が確認された。表土から確認面までの深さは約70～80cmである。確認面から溝底面までの堀り込みは15cmである。遺物は殆ど皆無の状態であった。

5トレンチ

トレンチ北側部分で土坑が確認された。表土から確認面までの深さは約80cmである。確認面から土坑底面までの堀り込みは28cmあるが、比較的なだらかな落ち込みである。覆土は暗黒色砂質土を主体としている。底面直上付近でカワラケ4が出土した。外面底部に墨書が観察された。中央部分が欠失しているが、「中」と書かれているのかもしれない。近世まで遡ると思われる。また、一括遺物として須恵器杯片2、カワラケ片3及び焙烙5が出土している。3、5は、近世期の遺物であろう。

6トレンチ

トレンチ西側において、溝が確認された。表土から確認面までの深さは約70～80cmである。確認面から溝底面までの堀り込みは約10cm程度である。北側壁付近でほぼ直角に北方向へ曲がっていると考えられる。遺物は極めて少なく破片資料のみであり、近代以降と思われる陶磁器片が含まれていた。特に図示できるものはなかった。覆土は暗黒色砂質土を主体としており、3･4･6トレンチにおける溝は同一のものである可能性が高い。5トレンチ内土坑と覆土は近似しており、ほぼ同時期のものと思われる。

小結

今回の調査区は、調査以前に構造物が存在していたものの、削平などの影響は考えにくい。1トレンチの土層堆積図において、基盤層とした暗黄褐色砂層の下層は、砂層の色が変わるのみで間層の土壌堆積等は無く、洪水等による砂の流入が間断なくあったことを窺わせる。

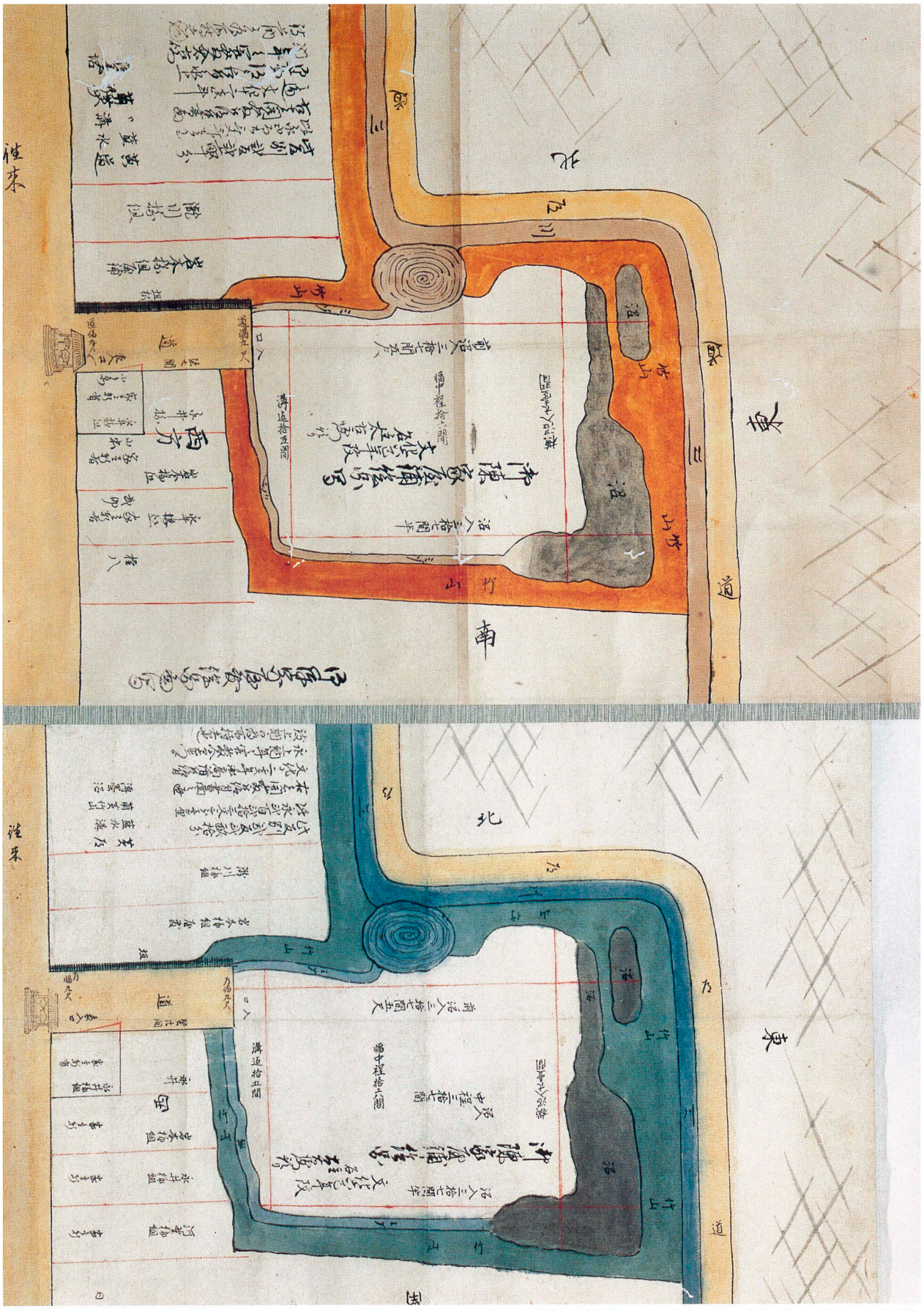
遺構の破壊による消滅の可能性も考えられたが、各トレンチの出土遺物が殆どないことから当初より遺構の密度は高くなかったと考えざるを得ない。

報告書抄録

ふりがな	へいせいじゅうさんねんどいちはらしないいせきはっくつちょうさほうこく
書名	平成１３年度市原市内遺跡発掘調査報告
副書名	奈良大仏台遺跡・南岩崎遺跡・八幡陣屋跡・柏原遺跡群
巻次	
シリーズ名	市原市内遺跡発掘調査報告
シリーズ番	第１５冊目
編著者名	小川　浩一
編集機関	財団法人市原市文化財センター
所在地	〒290-0011　千葉県市原市能満1,489番地　TEL0436-41-7300
発行年月日	2002年3月15日

所収遺跡（ふりがな）	所在地（ふりがな）	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
奈良大仏台遺跡（ならだいぶつだいいせき）	千葉県市原市奈良字屋敷台（ちばけんいちはらしならあざやしきだい）592の一部、565-2の一部	12219	セ338	35度29分24秒	140度13分22秒	20010409～20010412	825.13㎡のうちの82㎡	個人住宅建築
南岩崎遺跡（みなみいわさきいせき）	千葉県市原市寺谷字的場（ちばけんいちはらしてらやつあざまと）15・16・17番の一部	12219	セ341	35度24分06秒	140度06分50秒	20010416～20010420	520㎡のうちの52㎡	墓地造成
八幡陣屋跡（やわたじんやあと）	千葉県市原市八幡字仲町（ちばけんいちはらしやわたあざなかまち）1277番1の一部、1277番3、1278番1、1279番1	12219	セ343	35度32分07秒	140度07分25秒	20010514～20010516	209㎡のうちの20.9㎡	集合住宅建築
柏原遺跡群（かしわばらいせきぐん）	千葉県市原市柏原字原（ちばけんいちはらしかしわばらあざはら）229番	12219	セ349	35度28分50秒	140度04分00秒	20010723～20010725	431.82㎡のうちの43㎡	個人住宅建築

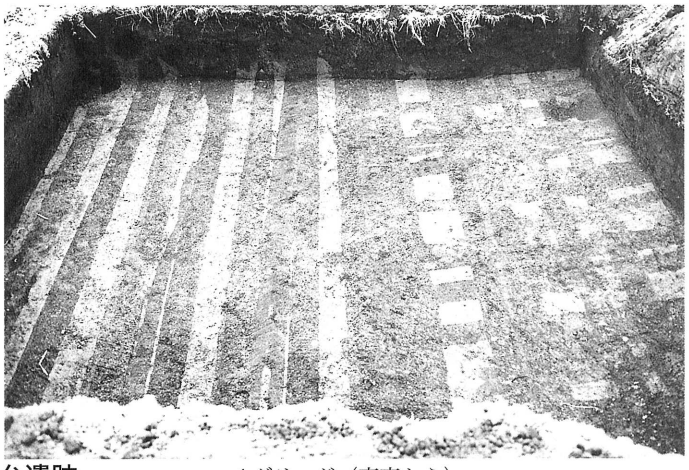
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
奈良大仏台遺跡	包蔵地	縄文時代	土抗１基	縄文土器	
南岩崎遺跡	包蔵地	古墳時代	（後期）古墳３基 （前期）竪穴住居跡１軒	土師器 須恵器	後期円墳３基の他に前期竪穴住居跡を確認した。
八幡陣屋跡	館跡	近世 近代	（近代以降）礎石建建物跡４棟	中近世陶磁器 礎石 土製品 銭	近代以降の礎石建建物跡が確認された。
柏原遺跡群	包蔵地	近世	（近世）土抗１基 溝１条	須恵器 カワラケ 土錘	


東
道
南
竹山
竹上
竹上
竹山
竹山
竹上
竹上
竹山
竹山
竹上
竹上
竹山

調査前近景（南から）

調査状況（北から）

１グリッド（南東から）



４グリッド（南東から）

奈良大仏台遺跡

調査前近景（南東から）

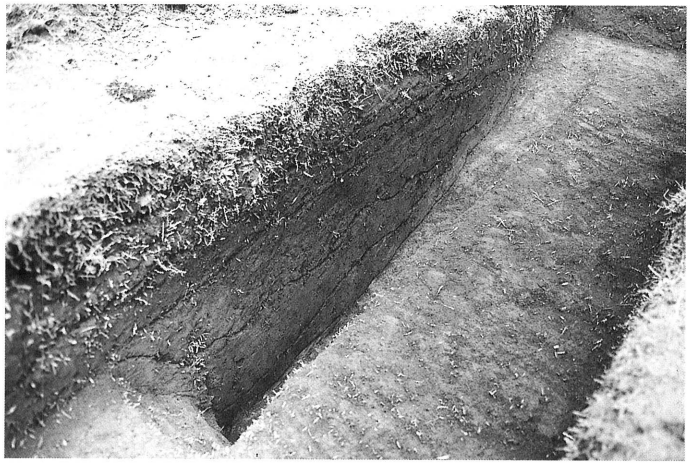
調査前近景（北から）

調査状況（南東から）

１トレンチ（北から）

南岩崎遺跡

図版３



１トレンチ（北西から）

８トレンチ（東から）

８トレ遺物出土状況（南東から）

６トレンチ（北から）

南岩崎遺跡

調査前近景（南から）

調査状況（北西から）

２トレンチ（南東から）

３トレンチ（北西から）

八幡陣屋跡

３トレンチ（南東から）

３トレンチ礎石（南西から）

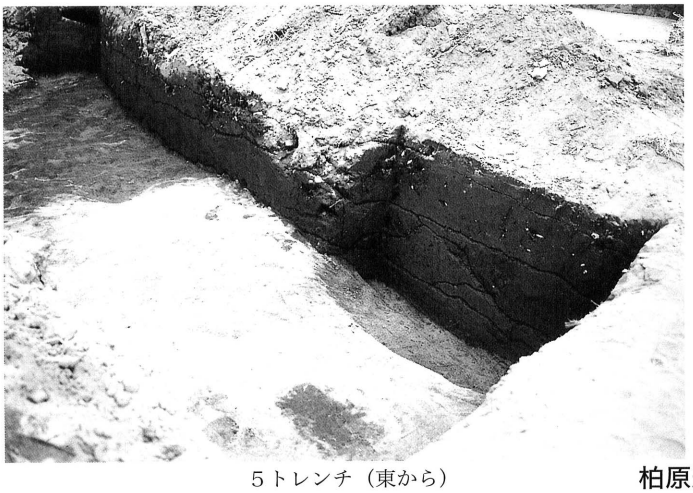
３トレンチ礎石（南西から）

調査区より陣屋推定方向を望む（北東から）

八幡陣屋跡

調査前近景（北から）

調査状況（北東から）

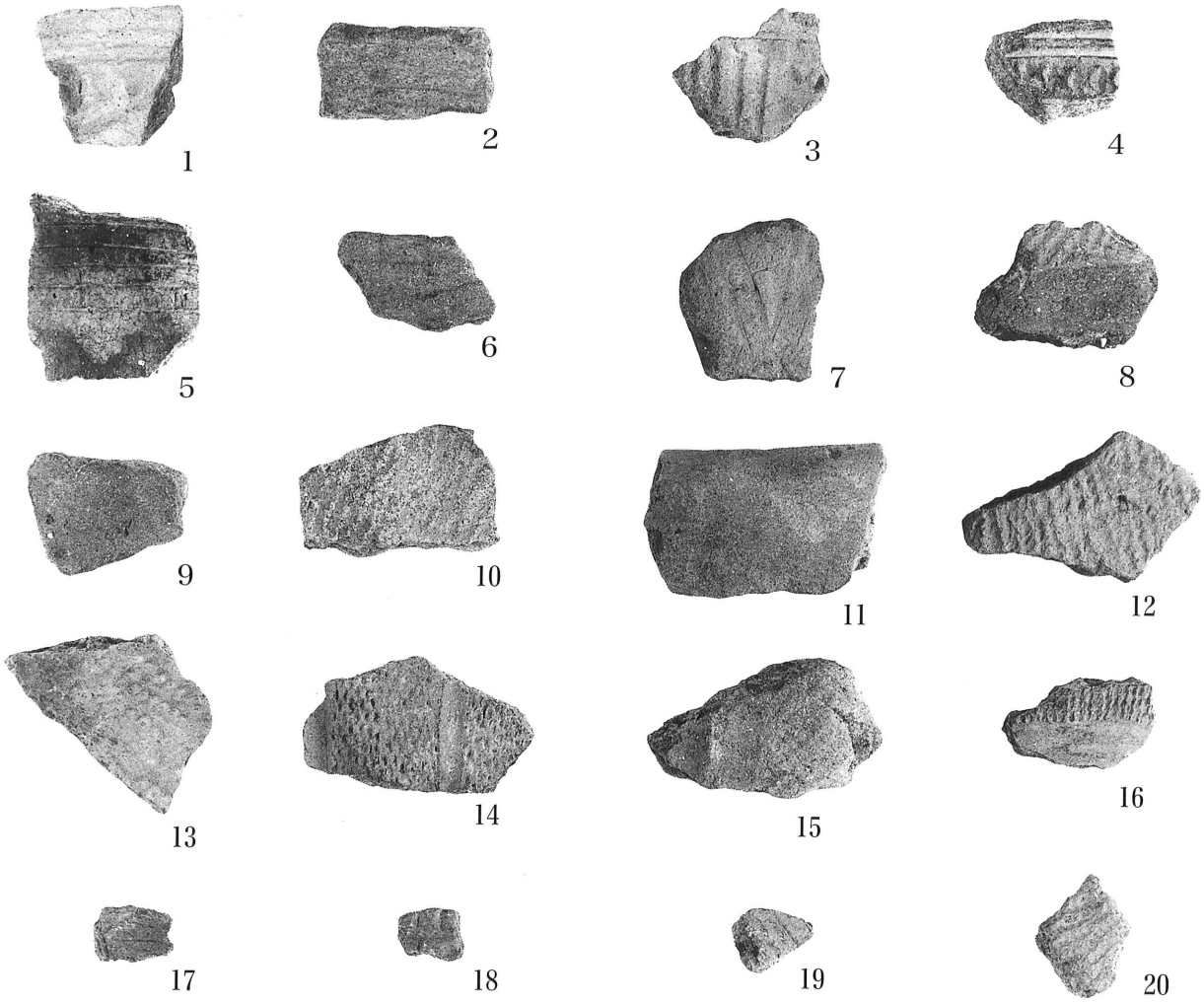


５トレンチ（東から）

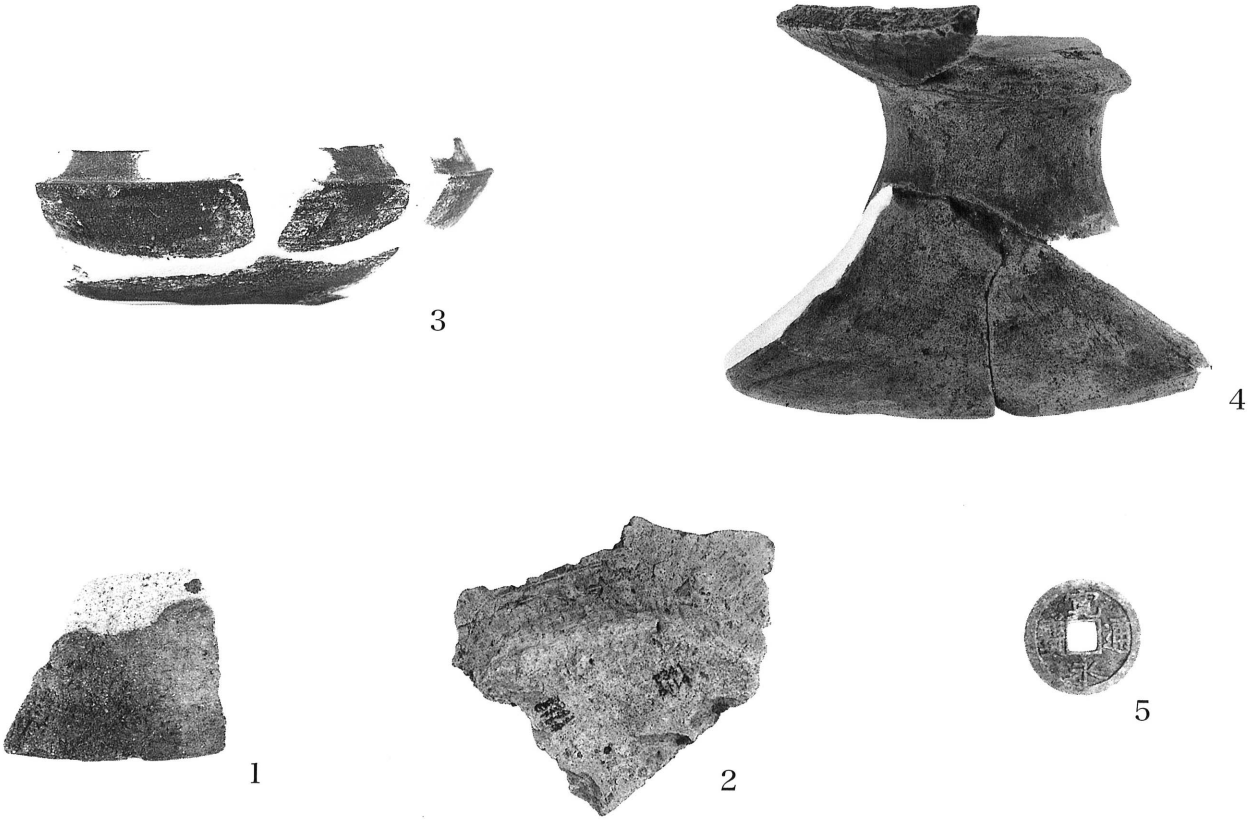
６トレンチ（南西から）

柏原遺跡群

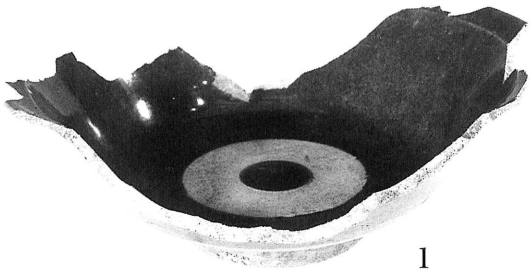
図版５



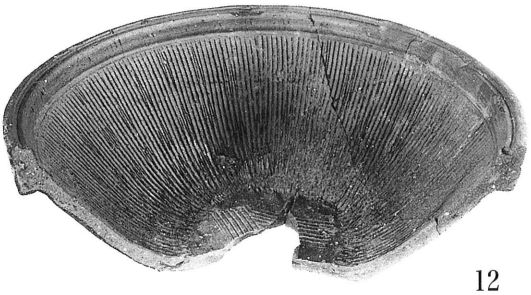
奈良大仏台遺跡



南岩崎遺跡



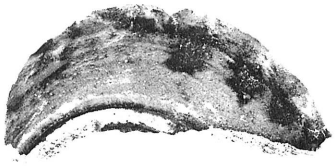
1

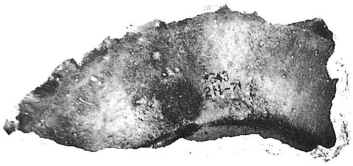


12

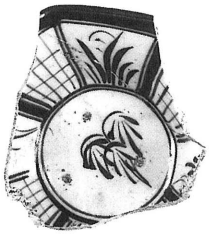
1

12

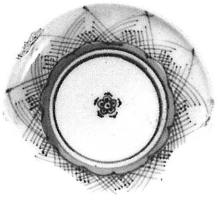




2

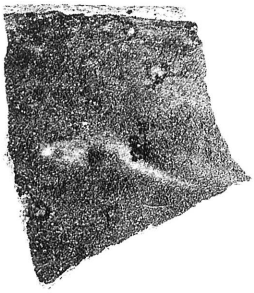


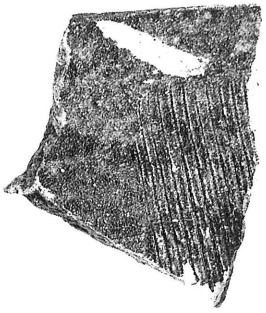
3



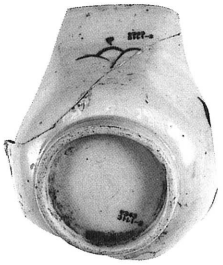
4

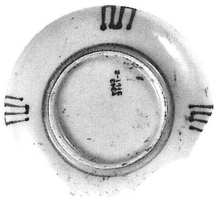
5



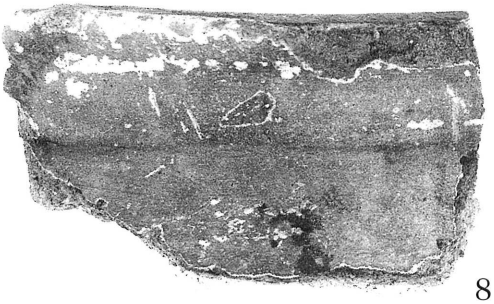


7



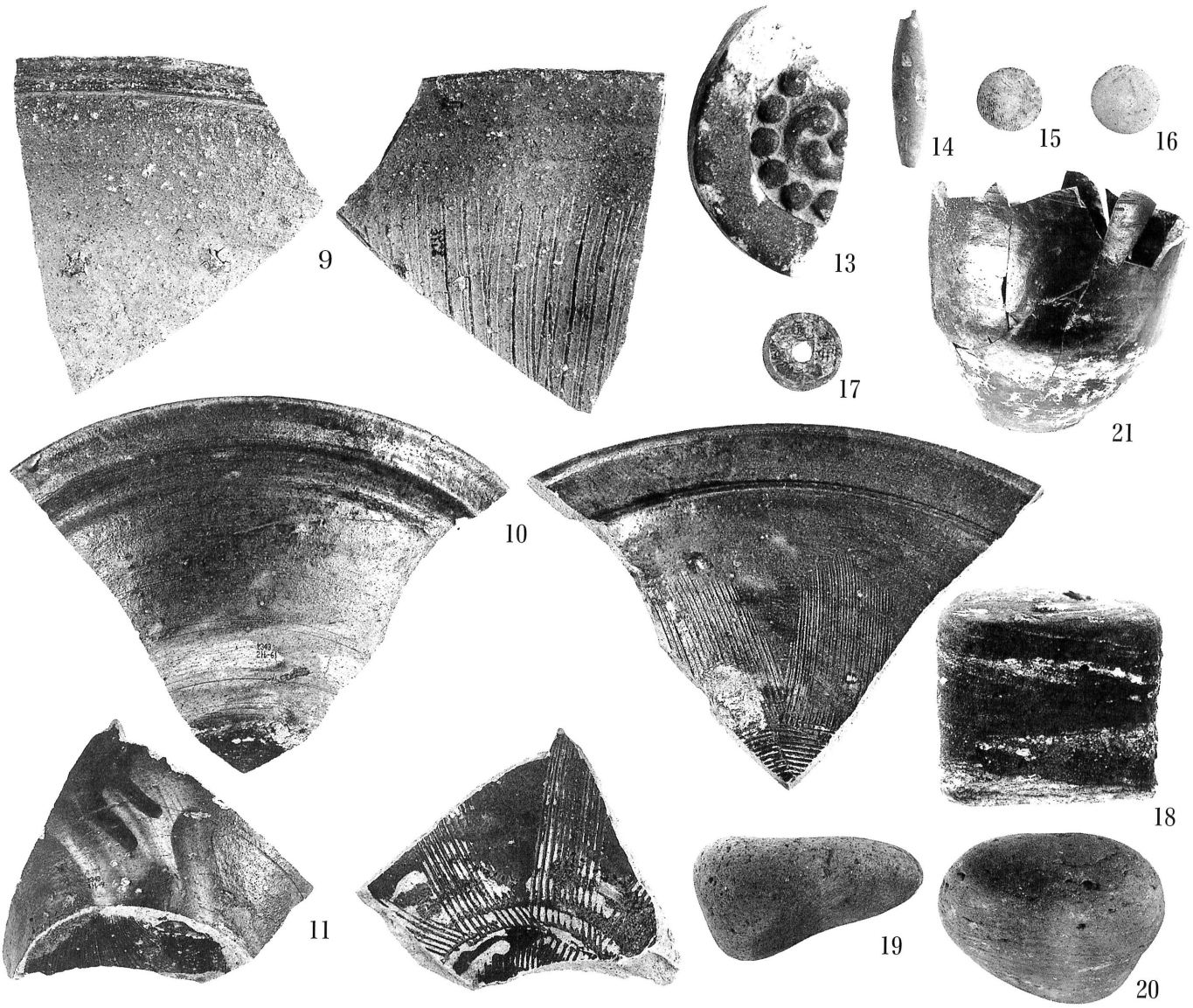


6

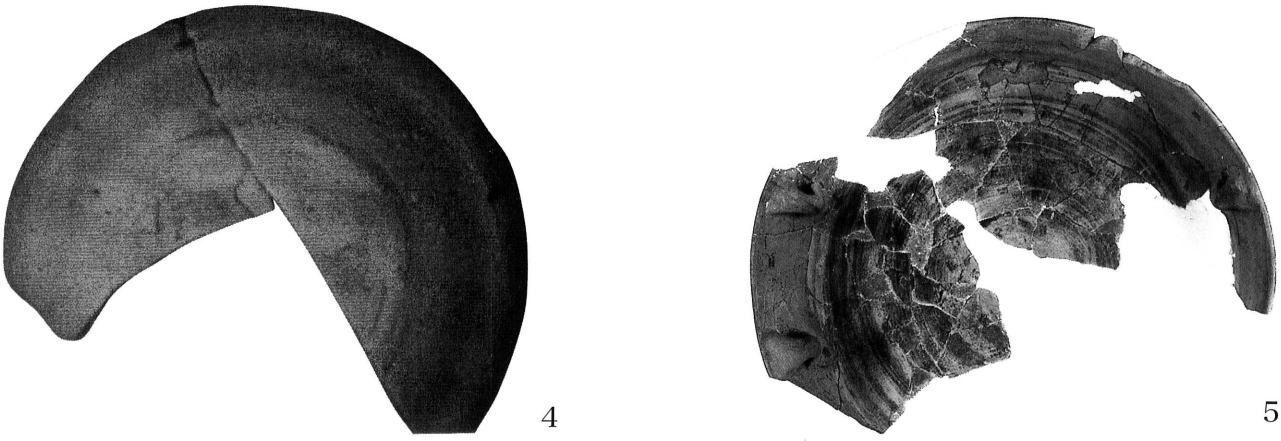


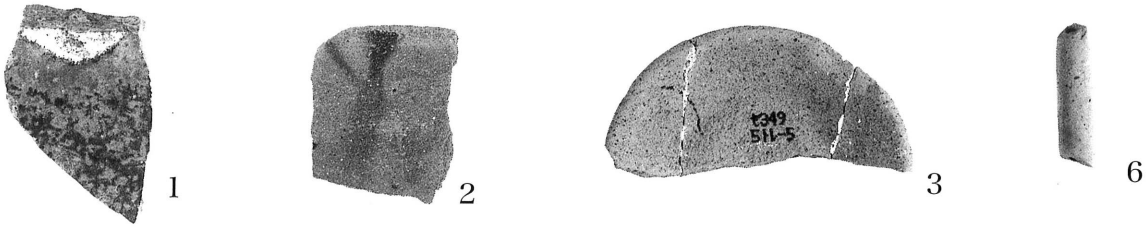
8

八幡陣屋跡



八幡陣屋跡





柏原遺跡群

平成13年度　市原市内遺跡発掘調査報告

平成14年3月5日　印刷
平成14年3月15日　発行

編　集　財団法人　市原市文化財センター
市原市能満1489
発　行　千葉県市原市教育委員会
市原市国分寺台中央1-1-1
印　刷　三陽工業株式会社
市原市五井5501-1